黒漆塗雪洞燭台
（関西電力・神戸らんぷミュージアム〈平成11年春開館予定〉蔵）

平成9年度 特別陳列

あかり

祭りとくらし

池田市神田八坂神社祭礼額灯（写真提供 池田市立歴史民俗資料館）

開館時間 午前9時30分～午後5時

休館日 月曜日・祝日の翌日（ただし、11月3日と24日は開館）

観覧料 大人 200円（160円）
高大生 100円（80円）
小中生 50円（40円）
（ ）内は20名以上の団体割引料金

展示解説 11月9日(日) 午後2時 当館特別展示室

11月1日(土)～11月30日(日)

吹田市立博物館

大阪府吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL.06-338-5500

平成9年度 特別陳列

あかり

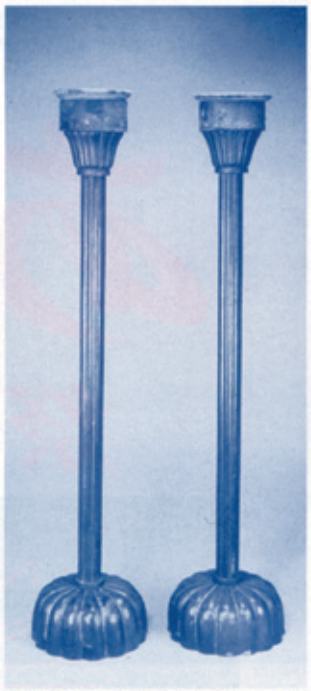
祭りとくらし

あかりの歴史は人類の火の使用とともに始まります。以来、木や竹を直接燃やした焚火から動植物の油、蠟燭のあかり、さらには石油ランプ、ガス灯、電灯へと灯火具はうつりかわってきました。ここには、人々がより明るく、安定したあかりを、しかも容易に得ようとした様々な工夫と創作がみられます。現代では、特に都市においては、夜も光に満ちあふれ、闇の世界を忘れてしまったようです。

あかりの道具がめざましく発展し多彩に変化するのは江戸時代以降のことです。江戸期のあかりの発展には経済発展による生活文化の向上、特に燃料の菜種油の栽培、搾油技術の進歩が背景にあります。これによって江戸時代の闇は明るく、活気に満ちていました。しかし、明るい夜を現出したのは、やはり都市であり、夜の明るさと賑わいは都市の象徴ともいえます。

また、あかりは日常生活以外に祭りにおいても用いられます。夜の闇は神霊が支配する場で、本来祭りは夜行われ、あかりは神霊を導く目印、標識とされました。しかし、明るい江戸時代の都市では、祭礼におけるあかりも闇において慎んで神を迎えるあかりから、そのあざやかさによって祭りを彩り飾る風流へとなっていきます。

くらしのあかりとしての灯火具の歴史と明るくなった都市の夜の賑わいと都市祭礼の風流を展観するこの展示が、「あかり」の持つ意味を考えていただく機会になれば幸いです。

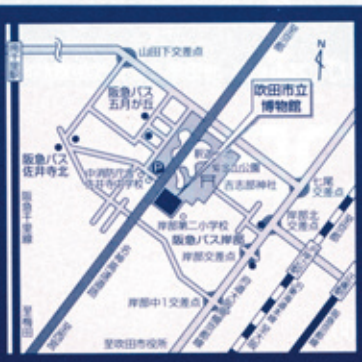


菊灯台（関西電力・神戸らんぷミュージアム（平成11年春開館予定）蔵）

浪花百景の内 新町廓中九軒夜桜（大阪城天守閣蔵）

無尽灯（奈良県立民俗博物館蔵）

都百景の内 祇園会宵山飾り（ナカガワフォトギャラリー蔵）



■交通案内

●阪急千里線吹田駅から

桃山台駅前・山田櫻切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

阪急山田・千里中央・摂津ふれあいの里ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

●阪急千里線南千里駅から

JR吹田ゆきバス②③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

●JR東海道本線岸辺駅下車徒歩20分

●車でのご来館は、佐井寺北・五月が丘方面からお願いします。